近代女性向け雑誌記事における一人称代名詞の分析
—形態論情報付き『近代女性雑誌コーパス』を用いて—

近藤 明日子（国立国語研究所コーパス開発センター）†

First Person Pronouns in the Articles Published in the Modern Women's Magazines: An Analysis of Morphologically Annotated *Modern Women's Magazines Corpus*

KONDO, Asuko (Center for Corpus Development, NINJAL)

１．はじめに

これまでの近代語の一人称代名詞に関する研究では、小説の会話部分、落語速記、口語文典といった話し言葉的性質の強い口語文を主に分析の対象としてきた[1]。一方で、雑誌『太陽』（1895～1928 刊）に基づく『太陽コーパス』（国立国語研究所（編）、2005）を用いた分析から、当時、一人称代名詞は話し言葉的性質の強い口語文のみに出現するのではなく、例えば論説文のような、書き言葉的性質の強い文章にも多く出現し、その使用実態は話し言葉的性質の強い口語文のそれとは大きく異なることも明らかにされつつある（近藤、2008・2011・2012）。本稿では、『太陽コーパス』の比較資料として作成された『近代女性雑誌コーパス』（国立国語研究所、2006）に形態論情報を新たに付与したデータを利用して、明治後期から大正期にかけて刊行された女性向け雑誌に出現する一人称代名詞を網羅的に抽出し、分析対象とする。そして、一人称代名詞の語形と文章の種類との対応関係や、語形と著者性別・文体との対応関係の点から、文語文体から口語文体へ文体が大きく変化した時期における雑誌記事での一人称代名詞の使用実態について、その一部を明らかにする。

２．形態論情報付き『近代女性雑誌コーパス』

『近代女性雑誌コーパス』は、明治後期から大正期にかけて刊行された女性向け雑誌に基づくコーパスである。『女学雑誌』（1894～1895 年刊行分 31 冊）、『女学世界』（1909 年刊行分 6 冊）、『婦人倶楽部』（1925 年刊行分 3 冊）の計 40 冊 1362 記事が収録されており、『太陽コーパス』と比較させながら、当時の女性が読んでいた書き言葉の実態を把握することが可能な資料となっている（田中、2006）。この『近代女性雑誌コーパス』を利用することで、雑誌『太陽』の主な読者層からは外れていた女性を対象とする雑誌記事での一人称代名詞の使用実態の一部が明らかになると考える。また、『太陽コーパス』の掲載記事のほとんどが男性の著したものであるのに対し、『近代女性雑誌コーパス』の掲載記事は女性の著したものが多く含まれる。よって、『近代女性雑誌コーパス』から当時の一人称代名詞使用の男女差について明らかになることも期待される。

ただし、公開されている『近代女性雑誌コーパス』には、形態素解析による形態論情報が付与されていない。これはコーパス開発当時、近代語を含めた古い時代の日本語資料に

---

† kondo@ninjal.ac.jp

[1] ある程度の年代にわたる複数の資料を対象に複数の一人称代名詞の分析を行った先行研究として、岡田（1998）・祁（2006a）（2006b）・那須（1986）・房（2004）などがある。

ついて、実用的な精度で形態素解析することが実現されていなかったためである。しかし、近年になり近代の文語論説文を対象とする形態素解析辞書「近代文語 UniDic」（小木曽、2009）や旧仮名遣いの口語文を対象とする形態素解析辞書（小木曽、2012）が開発されるなど、近代語の資料も実用的な精度で形態素解析できる環境が整ってきた。国立国語研究所の形態論情報データベース（小木曽・中村、2011）には、これらの辞書を用いて形態素解析したデータが格納されている。本稿ではこのデータベースの 2013 年 1 月時点のデータに基づき、分析・考察を行う。

なお、形態論情報から得られる『近代女性雑誌コーパス』の延べ語数（記号類除く）は 1,265,905 語である。

３．一人称代名詞の抽出

漢文・欧文部分[2]を除いた『近代女性雑誌コーパス』全体から、次の①～③の手順で一人称代名詞を抽出した。

① 形態論情報で品詞が「代名詞」となっている見出し語を抽出する。

② ①で抽出された見出し語のうち、一人称代名詞として用いられるものを選択する[3]。

③ ②で選択した見出し語について、コーパスのルビ情報や文脈を参照し、解析誤りの修正を手作業で行う 。また、一人称代名詞の表記に用いられる主な文字列と同じ出現形をとる代名詞以外の見出し語についても、一人称代名詞と新たに見なされるものは修正を行う。さらに、出雲（2004）で明治の女性の論説的文章に用いられる一人称代名詞として挙げられている語形のうち、コーパスの形態論情報では代名詞とされていなかった「妹（まい）」「小妹（しょうまい）」について、新たに文字列検索を行い、一人称代名詞と見なされるものは修正を行った。

この手順により抽出された一人称代名詞の語形とそれぞれの粗頻度と出現記事数を示したものが表 1 である。1 記事に複数の語形が出現する場合、出現記事数はそれぞれの語形で重複してカウントした（表 2 以下も同様）。27 種類の語形が得られ、一人称代名詞全体の粗頻度は 4,896 語となった。近藤（2012）の『太陽コーパ

表１　一人称代名詞の粗頻度

語形	粗頻度	出現記事数
わたし	2,025	182
わたくし	930	206
余	614	111
僕	432	52
吾人	201	66
おれ	106	30
わらわ	96	12
我々	80	40
余輩	80	15
それがし	57	18
わし	52	14
妾(しょう)	45	16
あたし	42	8
我輩(わがはい)	41	29
拙者	33	3
妹(まい)	16	2
てまえ	10	7
おいら	8	5
わなみ	6	1
おら	4	4
あたい	5	4
小妹(しょうまい)	5	2
やつがれ	2	2
わて	2	1
あっし	1	1
うら	1	1
わい	1	1
一人称代名詞全体	4,894	555

[2] 漢文・欧文部分の抽出は、コーパスの引用タグの種別属性値を使って行った。『女性雑誌コーパス』の XML タグの仕様は『太陽コーパス』のものに準拠する。『太陽コーパス』の XML タグの仕様については田中（2005）を参照のこと。

[3] 「われ」のように、一人称代名詞だけでなく二人称代名詞・反射指示代名詞といった他の用法でも多く用いられる見出し語については本稿では考察対象外とした。

ス』での抽出結果と比較すると、『太陽コーパス』に出現せず『女性雑誌コーパス』のみに出現する語形として「妾・妹・てまえ・あたい・小妹・やつがれ・わい」の 7 語形があげられる。そのうち「妾・妹・あたい・小妹」の 4 語形は女性専用と言える一人称代名詞であり、女性向け雑誌ならではの出現傾向となっている。

４．文章の種類と一人称代名詞との対応関係

次に、表 1 でとりあげた 27 語形について、文章の種類との対応関係について見ていく。ここでいう文章の種類とは、その書き言葉・話し言葉的性質の強弱により分類するものである。まず、書き言葉的性質の強い文章の代表として「非文学作品である記事の地の文」を選ぶ。『女性雑誌コーパス』の扱う時期は言文一致の完成する時期に一致し、地の文も文語文体から口語文体に大きく変化する。このことから、「非文学作品である記事の地の文」を文語文体のものと口語文体のものにさらに分けることにする。反対に話し言葉的性質の強い文章の代表として、「文学作品の会話部分」を選ぶ。本稿の分析の観点とする文章の種類を改めてあげると、（ア）文語地の文（非文学）、（イ）口語地の文（非文学）、（ウ）口語会話（文学）の 3 種類となる。文章の種類別の本文の抽出は、コーパスに XML タグによって付与された各種情報に基づいて行った[4]。

この 3 種の文章の種類ごとに、各語形の粗頻度、出現記事数、およびコーパス中で該当種類の文章を含む全記事数を示したものが表 2 である。値が 0 の場合、空欄で示した（表 3 以下も同様）。（　）内の

表 2　一人称代名詞の文章の種類別粗頻度・出現記事数

語形	文語地の文		口語地の文		口語会話	
	粗頻度	出現記事数	粗頻度	出現記事数	粗頻度	出現記事数
わたし	2	1 (0.2)	457	67 (25.3)	462	52 (29.4)
わたくし	13	3 (0.5)	399	60 (22.6)	89	27 (15.3)
余	258	52 (9.0)	6	4 (1.5)	4	3 (1.7)
僕	1	1 (0.2)	15	7 (2.6)	289	29 (16.4)
吾人	163	46 (8.0)	7	4 (1.5)		
おれ			1	1 (0.4)	75	19 (10.7)
わらわ	2	1 (0.2)	1	1 (0.4)		
我々	7	5 (0.9)	25	12 (4.5)	25	8 (4.5)
余輩	60	10 (1.7)				
それがし	46	13 (2.3)				
わし					45	8 (4.5)
妾(しょう)	6	4 (0.7)				
あたし			2	1 (0.4)	12	6 (3.4)
我輩(わがはい)	26	17 (3.0)	3	3 (1.1)		
拙者					33	3 (1.7)
妹(まい)	16	2 (0.3)				
てまえ			1	1 (0.4)	6	4 (2.3)
おいら					7	4 (2.3)
わなみ						
おら					3	3 (1.7)
あたい					4	3 (1.7)
小妹(しょうまい)	1	1 (0.2)				
やつがれ						
わて					2	1 (0.6)
あっし						
うら						
わい					1	1 (0.6)
コーパス全体記事数		575 (100.0)		265 (100.0)		177 (100.0)

[4] 地の文は、引用タグによってマークアップされていない部分とした。会話部分は、種別属性値が「会話」の引用タグによってマークアップされている部分とした。文学作品・非文学作品の区別は、記事タグのジャンル属性値の NDC 番号の左 2 桁が 91～99 および 9X となっているタグでマークアップされている部分を文学作品とし、それ以外の部分を非文学作品とすることで行った。文語・口語の区別は、記事タグおよび引用タグの文体属性値に基づき行った。

値はコーパス全体記事数に対する該当語形の出現記事数の割合（単位%）である。

語形と文章の種類との対応関係を見るために、表 2 の（　）内の値を用いてコレスポンデンス分析[5]を行った。粗頻度ではなく出現記事数に基づく値を用いるのは、一人称代名詞は特定の記事に集中して用いられる傾向があり、粗頻度を用いた分析ではその特定の記事の傾向に分析結果が左右されると考えたためである。分析結果から第 1 次元（寄与率 80.26%）と第 2 次元（寄与率 19.74%）の得点を 2 次元空間上に布置したものが図 1 である。

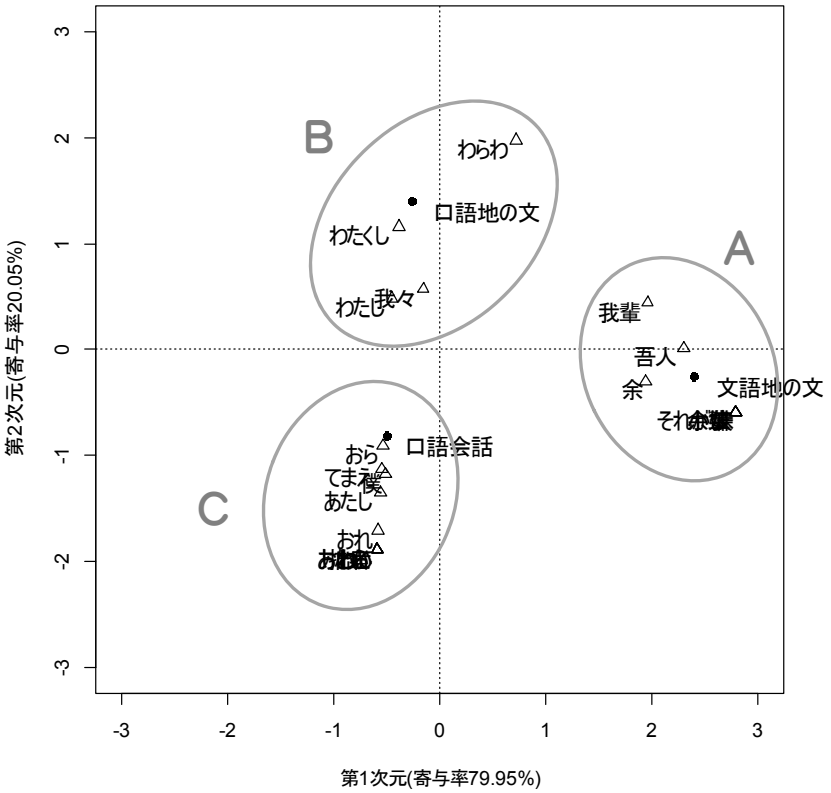

図 1　一人称代名詞の語形と文章の種類の散布図

図 1 から、一人称代名詞の語形と文章の種類との間に強い対応関係が確認でき、文章の種類との親疎関係から語形を次の A～C の 3 グループに分けることができる。文語地の文に近い A グループの語形が最も書き言葉的性質が強く、B・C の順に書き言葉的性質が弱く話し言葉的性質が強くなり、口語会話に近い C グループの語形が最も話し言葉的性質が強いと見なされる。

A　「吾人・妾・小妹・それがし・妹・余・余輩・我輩」
　…文語地の文で主に用いられ、口語地の文・口語会話ではほとんど用いられない
B　「わたくし・わたし・わらわ・我々」
　…口語地の文・口語会話で主に用いられ、文語地の文ではほとんど用いられない
C　「あたい・あたし・おいら・おら・おれ・拙者・てまえ・僕・わい・わし・わて」
　…口語会話で主に用いられ、文語地の文・口語地の文ではほとんど用いられない

地の文での一人称代名詞の使用実態は口語会話とは大きく異なることになり、一人称代

[5] 分析には統計分析ソフト R の MASS パッケージの corresp 関数を用いた。

名詞全般について考察するためには、分析対象として口語会話だけでなく地の文も含める必要があることが改めて確認された。

５．文語地の文の一人称代名詞

ここからは、地の文に出現する一人称代名詞について特に取り上げ、その使用実態についてより詳しく分析・考察する。まず、文語地の文に出現する一人称代名詞を取り上げる。

その前提として、コーパス全体における文語地の文を持つ非文学記事（以下、「文語記事」）の実態を見ていく。表 3 は、文語記事の数量を刊行年・著者性別・記事文体ごとに示したものである。1894 年刊行分の記事については 1895 年刊行分と併せて集計した。著者性別はコーパスに同梱されている著者リスト（authors.xml）に挙げられている著者について、その著者名や記事内容から判断し、「男」「女」「不明」の 3 種に分類した。無署名および複数著者の記事はすべて著者性別を「不明」とした。記事文体とは記事中で使用されている文末辞の種類によって分類するものを言う。ここでは文末辞に「候（そうろ）う」を用いる候文か否かという観点から記事文体を分類した。地の文に動詞「候う（ソウロウ）」が 1 回以上出現する文語記事 35 記事のうち、記事の一部分のみが候文になっているものや前代の著作であるものを除いた 13 記事を「候文」とし、それ以外の記事を「非候文」に分類した。

表 3　刊行年・著者性別・記事文体別の文語記事数

	1895		1909		1925		通年	
	非候文	候文	非候文	候文	非候文	候文	非候文	候文
男	243	4	1				244	4
女	6	3	6	3			12	6
不明	246	3	59		1		306	3
小計	495	10	66	3	1		562	13
合計	505		69		1		575	

刊行年ごとの合計記事数の経年変化を見ると、1895 年に 505 記事あった文語記事の数は年を追うごとに急激に減少し、1925 年に至って 1 記事しかない。これは、文語文体から口語文体へ文体の基調が大きく変化した当時の書き言葉のありようと相関した変化と言える。著者性別ごとに記事数の経年変化を見ると、1895 年は男性が著者の記事がほとんどを占め、女性が著者の記事はわずかであるのが、1909 年は男性が 1 記事に対し女性が 9 記事と記事数の多寡が逆転していることが分かる。

また、記事文体と著者性別との対応関係を見るために、通年での値による男女別・記事文体別の 2×2 クロス表でフィッシャーの正確確率検定[6]を行ったところ p=.0000 となり、1% 水準で非候文は男性が有意に多く、候文は女性が有意に多いことが確認された。つまり、女性は「候う」を用いて読み手への配慮を示す文体を多用する傾向があることになる。

以上の文語記事全体の傾向を踏まえ、文語地の文に出現する一人称代名詞について見ていく。著者が男性または女性の記事について刊行年・記事文体別に一人称代名詞の語形ごとの出現記事数を示したものが表 4 である。1925 年の文語記事には一人称代名詞が出現しなかったので表中に載せていない。

[6] 検定には R の fisher.test 関数を用いた。

表 4　文語地の文における一人称代名詞の著者性別・刊行年・記事文体別の出現記事数

男性

グループ	語形	1895		1909		通年		合計
		非候文	候文	非候文	候文	非候文	候文	
A	余	34				34		34
	吾人	28				28		28
	我輩	11				11		11
	余輩	9				9		9
	それがし	9				9		9
B	我々	2				2		2
C	僕	1				1		1

女性

グループ	語形	1895		1909		通年		合計
		非候文	候文	非候文	候文	非候文	候文	
A	妾		1				1	1
	小妹		1				1	1
	妹		1				1	1
	余	1				1		1
B	我々	1			1	1	1	2
	わたくし		1		1		2	2

まず男性による記事を見ると、非候文のものにのみ一人称代名詞が出現する。この傾向は、表 3 にある男性による記事の文体別数と相関した結果と考えられる。出現する語形は A グループの「余・吾人・我輩・余輩・それがし」を中心とし、B グループの「我々」もわずかに出現する。以下に用例をあげる。

(1) 余は先般園照マクレーン事件裁判の判決書を英國に申遣はし置きしを以到着次第貴社にも贈る可し（1984 年 29 号「園照女に関して　其一」佐伯理一郎）[7]

(2) 何［なに］を以［もつ］て然［し］か言［い］ふと問［と］ふものあらば、吾［ご］人［じん］は先［ま］づ「女［ぢよ］學［がく］生［せい］が家［いへ］を成［な］して評［ひやう］判［ばん］あしき所以［ゆゑん］、何處［いづこ］にありや」と反［はん］問［もん］せん。（1894 年 31 号「女生徒の卒業と婚嫁」巌本善治）

なお、C グループの「僕」が 1 記事に出現するが、これは小松（1999）に言う漢文で使用される聞き手への敬意の強い「僕」に通じるものであり、当時の口語会話に出現する「僕」とは性質の異なるものである。

次に女性による記事を見ると、まず「妾・小妹・妹」という女性専用の語形が出現する点が大きな特徴としてあげられる。一方で、「余」のように主に男性が用いるとされる語形を女性も用いる場合があることも分かる。以下に例をあげる。

(3) 小妹事茲に貴欄を愛讀せらるゝ御婦人方に對し數言の祝辭を呈し度御受納の上貴白に御掲載被下候はゞ幸甚に存じ候。（1895 年 2 号「米国ハリス夫人の寄書」フロラ、ビー、ハリス）

(4) 本篇の批評につきては、未だ一冊にまとまりて出板にならぬ先きより、既に諸大家の評やかましければ更に予の拙評を加ふるの要を見ず。（1895 年 8 号「新刊書」磯松まつ子）

また、男性による記事とは異なり、A グループの「妾・小妹・妹」や B グループの「わたくし」のように候文の記事に出現する語形が認められる。この傾向は、表 3 にある女性による記事の文体別数と相関した結果である可能性がある。ただし、女性による記事や候

[7] 用例の引用に際し、［　］内にルビを示し、末尾の（　）内に刊行年・号数・記事題名・記事著者を示す。

文の記事の数量自体が少ないため、明確なことは言えない

語形別に見ると、A グループのうち「余・吾人・我輩・余輩・それがし」は非候文にのみ出現するのに対し、同じ A グループでも「妾・小妹・妹」は候文にのみ出現する。B グループでは「我々」が非候文のみに出現し、「わたくし」は候文のみに出現する。同じグループ内でも記事文体に対応した使い分けがあったと見られるが、これについても、出現記事数の少ない語形については明確なことは言えない。文語地の文での語形と著者性別と記事文体との対応関係については、今後対象資料を広げて分析を重ねる必要があるだろう[8]。

６．口語地の文の一人称代名詞

次に、口語地の文での一人称代名詞の使用実態についてより詳しく見ていく。

その前提として、コーパス全体における口語地の文を持つ非文学記事（以下、「口語記事」）の実態を見るため、その数量を刊行年・著者性別・記事文体ごとに表 5 に示す。刊行年と著者性別の分類については表 3 と同様の処理をした。記事文体は、ここでは常体か敬体かという観点から分類した。助動詞「です」「ます」の出現回数が 0 回の記事の文体を「常体」、助動詞「です」「ます」の出現回数が 1 回以上で、かつ動詞「御座る（ゴザル）」＋助動詞「ます」の出現回数が 0 回の記事の文体を「敬体」、動詞「御座る（ゴザル）」＋助動詞「ます」の出現回数が 1 回以上の記事の文体を「敬体（ございます）」として分類した。

表 5　刊行年・著者性別・記事文体別の口語記事数

	1895			1909			1925			通年		
	常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)
男	1		1	11	16		11	21	4	23	37	5
女				8	15	47		9	9	8	24	56
不明		1		19	9	16	16	45	6	35	55	22
小計	1	1	1	38	40	63	27	75	19	66	116	83
合計	3			141			121			265		

刊行年ごとの合計記事数の経年変化を見ると、1895 年には記事数 3 と同年の文語記事数 505 に比較してもわずかであったのが、1909 年には 141 と急増し、同年の文語記事数 69 を上回るまでになる。1925 年は 121 と 1909 年より記事数が減少するが、同年の文語記事数は 1 であり、非文学記事のほとんどは口語記事であることになる[9]。文語文体から口語文体へ文体の基調が大きく変化した当時の書き言葉のありようと相関する変化と言える。著者性別ごとに記事数の経年変化を見ると、1895 年は女性が著者の記事がないが、1909 年では男性 27 記事に対して女性 70 記事と女性による記事数のほうが多くなる。しかし、1925 年には男性 36 記事に対して女性 18 記事と男性による記事数のほうが多くなる。

また、記事文体と著者性別との対応関係を見るために、通年での値による記事文体別・男女別の 3×2 クロス表に χ^2 検定[10]による多重比較（ボンフェローニ法）を行ったところ、「常体」対「敬体」で p=.0925、「常体」対「敬体（ございます）」で p=.0000、「敬体」対「敬体（ございます）」で p=.0000 となり、1%水準で常体および敬体は男性で有意に多く、敬体

[8] 出雲（2004）は、清水紫琴・若松賤子らの論説的文章に出現する一人称代名詞について主に『女学雑誌』で調査し、「吾人・余・余輩・わらわ・妾・小妹・妹・われ・わなみ・わたし・わたくし」等の出現を報告する。ただし、各語形の候文・非候文文語・口語別の頻度は示されていない。

[9] 田中（2006）によれば、著作権の事情から 1925 年分は 1909 年分より公開できた分量が少なく、さらに 1925 年は 1909 年より文学ジャンルの占める割合が高くなっている。非文学の口語記事数が 1909 年より 1925 年で少なくなるのはこれらのことが主に影響していると考えられる。

[10] 検定には R の chisq.test 関数を用いた。

（ございます）は女性で有意に多いことが確認された。つまり、口語記事において女性は男性より読み手に配慮した丁重な文体を用いていることになる。文語記事で女性が候文を多用する傾向と併せて見れば、当時の女性は文語・口語を問わず、丁重さといった読み手への配慮がより強く表せる文体を選択する傾向にあったことになる。

以上の口語記事全体の傾向を踏まえ、口語地の文に出現する一人称代名詞について見ていく。著者が男性または女性の記事について刊行年・記事文体別に一人称代名詞の語形ごとの出現記事数を示したものが表 6 である。

表 6　口語地の文における一人称代名詞の著者性別・刊行年・記事文体別の出現記事数

男性

グループ	語形	1909			1925			通年			合計
		常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)	
A	吾人		1			3			4		4
	余	1	1					1	1		2
	我輩		2						2		2
B	わたくし	5	7					5	7		12
	わたし	2	3		2	13	1	4	16	1	21
	我々	2			3	4		5	4		9
C	僕	2	1		1	1		3	2		5

女性

グループ	語形	1909			1925			通年			合計
		常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)	常体	敬体	敬体(ございます)	
A	我輩		1						1		1
B	わたくし	1	6	29		1		1	7	29	37
	わたし	4	8	20		5	2	4	13	22	39
	我々	1						1			1
C	てまえ			1						1	1

まず、男性による記事を見ると、一人称代名詞の出現する記事は敬体が過半を占め、常体がそれに続き、敬体（ございます）はほとんどない。この傾向は、表 5 にある男性による記事の文体別数に相関した結果と考えられる。出現する語形は B グループの「わたくし・わたし・我々」を中心とし、A グループの「吾人・余・我輩」や C グループの「僕」も少数出現する。以下に例をあげる。

(5) まづ私［わたし］は、根［こん］本［ぽん］として、新［しん］夫［ふう］婦［ふ］は、當［たう］然［ぜん］別［べつ］居［きよ］すべきだと云［い］ふ説［せつ］を採［と］るものです。（1925 年 6 号「当然別居すべきもの」千葉亀雄）

(6) 先［せん］日［じつ］余［よ］が大［おほ］隈［くま］伯［はく］に遇［あ］つた時［とき］、伯［はく］は女［ぢよ］史［し］の事［こと］をヒドくほめて、吾［わが］黨［たう］の女［ぢよ］傑［けつ］ぢやと云［い］つてゐられたが、此［この］分［ぶん］では壽［じゆ］命［みやう］も伯［はく］同［どう］様［やう］百二十五歳［さい］迄［まで］は確［たし］かゝも知［し］れぬ。（1909 年 8 号「実践女学校」河岡潮風）

(7) 僕［ぼく］を女性［をんな］苛［いぢ］めの鬼［おに］でゞもあるやうに思［おも］ふてる女［ぢよ］學［がく］生［せい］諸［しよ］君［くん］もあるか知［し］らんが、女［をんな］に對［たい］しては却々［なか〜〜］親［しん］切［せつ］な男［をとこ］で女［ぢよ］學［がつ］校［かう］に教［けう］師［し］たること實［じつ］に十四［よ］年［ねん］、女［ぢよ］子［し］教［けう］育［いく］にかけては隨［ずい］分［ぶん］

の古［ふる］狸［だぬき］である。（1909 年 5 号「卒業生への注文」青柳有美）

次に女性による記事を見ると、一人称代名詞の出現する記事は敬体（ございます）が過半を占め、敬体がそれに続き、常体はわずかである。この傾向は、表 5 にある女性による記事の文体別数に相関した結果と考えられる。出現する語形は B グループの「わたくし・わたし」を中心とし、B グループの「我々」、C グループの「てまえ」もわずかに出現する。以下に例をあげる。

(8) 私［わたくし］は女［ぢよ］子［し］の獨［どく］身［しん］主［しゆ］義［ぎ］を絶［ぜつ］對［たい］に御［お］止［と］め申［まを］し上［あ］げますが自［じ］分［ぶん］は此［この］境［きやう］遇［ぐう］を天［てん］職［しよく］と感［かん］謝［しや］して及［およ］ぶ限［かぎ］り働［はたら］くつもりで御［ご］座［ざ］います。（1909 年 5 号「私の実行する精力主義」嘉悦孝子）

(9) 次に夫［をつと］も私［わたし］も至つてその讀［どく］書［しよ］家［か］ぢやありませんが、而も愛［あい］書［しよ］家［か］の方［はう］で、小［ちひ］さい建［たて］物［もの］ですが、裏［うら］に圖［と］書［しよ］館［くわん］もム［ござ］います。（1909 年 10 号「私の豪奢世界」すみれ女史）

(10) 堪［たま］らなくなつて男［だん］子［し］は帽［ぼう］を振［ふ］りわれ〜〜は手［て］にせる白［しろ］いハンカチーフを上［うへ］に捧［さゝ］げた。（1909 年 10 号「夏の新橋驛」秋雨）

なお、A グループの「我輩」の例は「我輩は下女である」という記事題名中に用いられたものであり、該当記事本文では「わたし・わたくし」が出現することから、例外的なものと見なしてよい。

語形別に見ると、A グループの「吾人・余・我輩」と B グループの「我々」と C グループの「僕」は常体および敬体の記事に出現し、敬体（ございます）の記事には出現しない。ただし、これらの語形の出現する文脈を確認すると、男性による記事のうち、「余」の出現する敬体の 1 記事、「吾人」の出現する敬体の 2 記事、「我輩」の出現する敬体の 2 記事、「僕」の出現するに 1 記事ついては、記事文体は敬体に分類したものの記事中の一部を占める常体の文中にこれらの語形が出現していることがわかった。また、女性による記事に出現する「我輩」については、上述のとおり例外的なものであった。整理すると、A グループの「余・我輩」は常体の記事のみに出現し、A グループの「吾人」と B グループの「我々」と C グループの「僕」は常体および敬体の記事に出現していることになる。一方 B グループの「わたくし・わたし」は常体・敬体の記事だけでなく敬体（ございます）の記事にも出現する。書き言葉的性質の強い A グループは常体・敬体に出現し、A グループよりも話し言葉的性質の強い B グループは敬体（ございます）に出現する傾向にあるとおおよそ言えるが、B・C グループにありながら敬体（ございます）に出現しない「我々・僕」のような語形もあり、語形の持つ書き言葉・話し言葉的性質の強弱と記事文体との間に対応関係があるとは単純には言い切れない。同じグループに属する語形であっても、さらにその内部で記事文体に対応した使い分けがあったと考えるのが穏当であろう。一人称代名詞の語形と記事文体との対応関係については、今後、調査対象資料を広げてさらに分析を深めたい。

7．おわりに

以上、形態論情報付き『近代女性雑誌コーパス』を用いて、主に非文学記事の地の文での一人称代名詞の使用実態について分析・考察した。記事著者の性別と記事文体との間には対応関係あることがまず確認でき、さらに記事文体に応じて一人称代名詞が使い分けら

れている傾向が見られた。実際の記事の執筆においては、一人称代名詞の選択より先に、著者性別に応じた記事文体の選択があったと考えるほうが自然であるならば、一人称代名詞の出現傾向は記事文体の出現傾向に強く影響を受け、その記事文体の出現傾向は著者性別の傾向に影響を受けていることになる。当時の記事地の文の一人称代名詞の使用実態を解明するためには、その前提として当時の著者性別ごとの記事文体の使用実態を把握することが重要であることが、本稿の考察から確認された。

記事文体と一人称代名詞の語形との対応関係については、『近代女性雑誌コーパス』のテキスト量が分析に十分ではなかったことや記事文体の認定方法に一層の工夫が必要であったことなどから、本稿では精緻な考察までたどりつけなかった。これらの問題点について改善をはかり、さらに考察を進めていきたい。

文献

石川慎一郎、前田忠彦、山崎誠（編）（2010）『言語研究のための統計入門』、くろしお出版

出雲朝子（2004）「女性の文章と近代」『日本語学』23:7、pp.27-37

岡田賢二（1998）「明治期の東京語における人称代名詞の研究―明治・大正期の落語の速記本にあらわれた一、二人称代名詞―」『埼玉大学国語教育論叢』2、pp.34-58

小木曽智信（2009）『科学研究費補助金研究成果報告書　近代文語文を対象とした形態素解析のための電子化辞書の作成とその活用』（http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic よりダウンロード可）

小木曽智信（2012）「旧仮名遣いの口語文を対象とした形態素解析辞書」『じんもんこん 2012 論文集』2012:7、pp.25-32

小木曽智信、中村壮範（2011）『特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度研究成果報告書　『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装　改訂版』（JC-U-10-01）

祁福鼎（2006a）「明治時代語における自称詞の使用実態と使用規範について」『文学研究論集』24、pp.45-61

祁福鼎（2006b）「明治時代語における自称詞の推移と位相について」『明治大学日本文学』32、pp.95(1)-78(18)

国立国語研究所（編）（2005）『太陽コーパス―雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社

小松寿雄（1999）「キミ・ボク対使用補考」『学苑』705、pp.68-77

近藤明日子（2008）「近代語における一人称代名詞「よ」「わがはい」―『太陽コーパス』を資料として―」『社会言語科学』11:1、pp.116-124

近藤明日子（2011）「『太陽コーパス』に見る一人称代名詞「吾人（ごじん）」―「余（よ）」との比較から―」『近代語研究』16、pp.63-80

近藤明日子（2012）「単語情報付き『太陽コーパス』を用いた一人称代名詞の分析」『日本語学会 2012 年度秋季大会予稿集』pp.229-234

田中牧郎（2005）「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究―『太陽コーパス』研究論文集―』博文館新社、pp.1-48

田中牧郎（2006）「『近代女性雑誌コーパス』の概要」『日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(B) 「20 世紀初期総合雑誌コーパス」の構築による確立期現代語の高精度な記述』pp.55-62（http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/doc/19w-mag-summary.pdf よりダウンロード可）

那須小代美（1986）「三遊亭円朝の人情噺における人称代名詞の考察」『国文研究』32、pp.38-52

房極哲（2004）「近代語における一、二人称代名詞の変遷について」『日本文化學報』21、pp.1-15

関連 URL

R	http://www.r-project.org/
『近代女性雑誌コーパス』	http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/woman-mag/
近代文語 UniDic	http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic